

新型コロナウイルスの猛威がやみませんが、ウイルス感染症が発症の原因になるがんは少なくありません。今回はB型、C型の肝炎ウイルスが発がんの8割を占める肝臓がんを取りあげました。

30代が発症のピークで、「マザーキラー」と呼ばれる子宮頸(けい)がんはほぼ100%がヒトパピローマウイルス(HPV)による感染が原因です。

新型コロナウイルスが怖い大きな理由は、ワクチンが存在しない点です。HPVにはワクチンが開発されており、わが国でも、2013年から、小学校6年〜高校1年の女子を対象に定期接種が始まっています。しかし、「副反応」の映

がん社会 を診る

中川 恵一



イラスト・中村 久美

ワクチンの大切さ見直そう

ることになります。なんと不公平な話ですが、背景に、ウイルスと発がんに関する日本人の知識不足があると思います。

女性の健康情報サービス「ルナルナ」と一般社団法人シンクパールが実施した「女性とがんの関係についての調査」の結果、子宮頸がんの主な感染経路が性交渉であるこ

いての理解も進んでおらず、ワクチンが定期接種(公費助成)で受けられることを知っている人は約2割で、自治体のHPVワクチンの取り組みも約9割の女性が知らないという結果となりました。ワクチンを接種していない理由は「ワクチンがあることを知らなかった」がトップで37%、次いで「接種後の副反応が心配だから」が約33%となり、多くの人がワクチン接種について正しい知識を持ってないことがうかがえます。

との認知率は約6割で、4割の人が感染経路を理解していませんでした。がん予防のためにもより正しい知識を啓発する必要を感じます。

ウイルスの恐ろしさは、今回のコロナ禍で骨身にしみたはず。ワクチンの大切さをもう一度考えてみる機会にしたいいものです。

また、HPVワクチンにつ

(東京大学病院准教授)